

## 靈的世俗性，序説

千葉 雅也\*

よろしくお願ひします。本発表では、小泉さんの『ドゥルーズの靈性』の冒頭とラストの二つの論文を合わせて読むことになります。

「ドゥルーズの靈性」というのは冒頭に置いてある文章なのですが、結構難しい文章で、たぶん何の知識もなくこの本を買った人は面食らって、それ以上読まなくなってしまう感じなのです。ただ、僕の『動きすぎたはいけない』にありがたくも言及してくださっているので、そのことにも触れたいと思います。対照的に、ラストの「フーコーの靈性」という文章は大変読みやすくクリアなもので、まずそこから話したいと思います。

先ほど廣瀬さんの話にも出てきましたが、小泉さんはこの「フーコーの靈性」を、ひとつのフレーズの解釈をめぐる展開しています。それは、「他界」および「別の生」の形式というふうにフーコーが言っているものです。ラストの時期のフーコーが、非常に深刻なものを賭けていたのが、*l'autre monde* と *l'autre vie* の結合なのです。

小泉さんはこのあと、「他界」と「別の生」、*l'autre monde* と *l'autre vie* の四つの組み合わせを出してくるのですが、ここで個人的に僕の理論的趣味の問題として気にしておきたいのは、フーコーが別の生の「形式」という言い方をしているということです。この「形式」というワードは、小泉さんのテキストのなかでは展開されていなかったもので、僕はここに力点を置いてみたいと思います。

さて、1, 2, 3, 4, と四つパターンが出てきています。まず「他界」というのは「あの世」ですね。「あの世」を目指すのだけれど、「別の生」というのは、あくまでもこの世のなかでの「別の生き方」なのだ、というのが一番目です。この世のなかで別の生き方をすることで、この世に居ながらにしてあの世を現出させる、それがフーコーのやろうとしたことだということになっています。この世界というのは、先ほどの話にも出たけれども、統治のどうしようもな

---

\* ちば まさや 立命館大学教授

いパワーゲームが展開しているのです、その全体に置き換えられるべき他界を目指すのですが、それをこの世界において生きたまま、この世界内で別の形式で生きることによって実現しようとするという形式になります。

それに対して、他のものが三つある。まず、「あの世+死後の生」という組み合わせで、この世はもうダメなので、あの世の新しい生命を熱望するという形式。これが「宗教」ですね。そしてもうひとつは、あの世といっても仕方がないので、この世しかない、この世界のなかで別の生き方をすればいいではないかというのが「世俗」的な生。そして、さらにもうひとつは、あくまでこの世界がドメインなのだけれど、そこでまるで死後の生のように生きるというもの。自分を死にまで追いやった状態で、この世界のなかでの戦いを展開するというもので、非常に「狂信」的でラディカルな立場というのが四番目のものになります。

大事なのは四番目と一番目が違うということなのです。フーコー＝小泉というのは一番目のほうを採るのですね。一番目を実行するのはどのような人なのかというと、パレーシアステースである。それはいかなることかといえば、統治一般に対する抵抗である。「統治されるものか!」ということですね。先ほどの廣瀬さんの話だと、そのアクチュアリティは昨今起こっている世界中の民衆蜂起がまさにそれなのだという方向で読解されていて、僕もそれに半分、あるいは四分の三くらいは「なるほど」と思うのですが、僕は別の読み筋として、もうちょっと静かな筋を出してみたいと思います。

この統治一般に対する抵抗——「統治されるものか!」というのが、後期フーコーにおいてはとくにキュニコス派に対する評価としてあります。キュニコス派というのは、そのアンチ統治という立場を、言葉というよりも、その姿かたち、振る舞い、生き様によって示しているのです。

ところで、そういった統治に対する反抗精神というのは、近代においては専門分化した諸々の諸批判へと分かれてしまいました。これは僕の補足ですが——あるいは小泉さんがこう思っているだろうということなのですが——、今や現代の大学では明らかに、そういった諸批判こそがある種の統治の技術になっている。ポリコレみたいなものですね。なので、「批判理論クソくらえ」ということにならざるをえない。そうすると、おそらく小泉＝フーコー的には、「生き様に回帰せよ」となる。フーコーの「人生論的転回」です。僕自身、哲学研究の人生論的転回とでもいうべきものを、とくに中島隆博と小泉先生から学んだと思っています。ご退職に際してのメッセージみたいですが（笑）。

思い出すと、学部時代にとある教員が、「学問は人生論ではありません」と授業で言ったことがあり、「ああそうなのか」と僕は一時期それに深く影響を受けてしまったのですが、その後、それは誤っていたと思い直しました。

そこでフーコーは、統治全般への抵抗の噴出を、78年のイランでの蜂起に見るのですね、

それをいったいどのようなものとして捉えるかなのですが、僕の解釈なのですが、ここでいったいなにが要求されたのかというと、とくに西洋において発達したような普遍的な市民権の概念を振りかざすようなものとしてではなくて、ある生の特殊な形式の名において、すなわちイスラームという名において、個々人の特異性を救済するというものではなかつたらうか、と思うのですね。ここに「形式」という概念あるいは「特異性」という概念を噛ませたいと思います。

ただただ「私」的な個人と、あるいは普遍的な市民というレベルの間であって、また国民国家でもないような、ある集合的な特殊性が、「生の形式」の再編を促している、ということです。ただ僕の場合、闘争に敗れた死者が導くというよりも、ある種の文化的なものと言うべきか、形式というものが新しい生き方の発明に関わってくるというところに議論の力点を置きたいと思うのです。

生の形式、ある形式を変える、あるいは形式を通して生き方が変わっていく。ここにさっそく僕のワードを入れると、それは「儀礼的」なものである。小泉論文では「形式性」というものは十分に強調されていなかったと思います。「あの世」(潜在的なもの)と、「この世」(現働的なもの)というのが、「別の形式」、すなわち「儀礼」によって結合される。それがいわば「霊的世俗性」である、というのが僕の考えです。

次はドゥルーズに行きます。「ドゥルーズの霊性」というのはなかなか難しいテキストでしたが、何回か読みました。まず、これは黙示録批判なのですが、すべてを滅亡させて新たな絶対権力の到来を期待するというのが黙示録で、しかし結局それは復讐精神(ルサンチマン)に駆動されている。それは特定の権力ではないすべての権力を滅ぼすような超一権力ですから、その意味でベンヤミンがいう神的暴力の熱望である。「それではダメだ」というのがドゥルーズだ。ドゥルーズが考えているのはポスト黙示録であって、それはすべてが滅亡したあとの「静謐」な時間なのであり、神的暴力の到来でもなんでもないような、宙ぶりの時間なわけです。

ところが、弱者の「集団的な魂」というのがいつまでも在る。それは復讐を求めているのであり、結局、神的暴力が到来することをどうしても求めてしまう。それをどう救済するか、という話になっております。ただこの点については、小泉さんのテキストの後半が非常に暗示的なので、いまひとつよくわからなかったのですね。とくに「復讐精神」ということについて、最後に僕は質問したいと思います。

小泉論文の基本線は次のようなものです。「絶滅以後を見通せ」。しかもそれを、今ここにおいて見通せ、ということです。「絶滅以後」というのは、光が消えた世界だとされます。

ところで、この論文で小泉さんは、あらゆるものは光であり、光のなかに光がある、という光一唯物論のようなことを、『シネマ』などを使いながら論証していくのですが、その次第に

については今回省略します。

ともかく、滅亡というのは光が消えるということなのです。だけれど光が消えてもなお残り続ける光があるという、やや撞着したレトリックが展開されます。そのすべてが滅亡した後になお残るものというのは、「退化したモノド」の「点滅」である。すべてが無くなってもなお、チカチカ点滅しているだけという状態が残る、と小泉さんは言います。『動きすぎたはいけない』のなかで、僕が「すべての光が消えた世界において、あちこちの局所に点る懐中電灯」というメタファーを書いている部分があり、そこを小泉さんは援用してくださって、まさにこの千葉が言っている懐中電灯というのが「退化したモノドの点滅」のことなのだ、というふうに小泉さんはおっしゃっている。

「退化したモノド」というのは、すべての存在者の秩序が崩壊した後でも、ただ点滅しているだけの状態があるのだけれど、それが新たな世界、新たな光の秩序が再開する萌芽であり、この世界の最もミニマムな状態がその点滅なのだ、ということです。そのような状態を小泉さんは幻視するわけです。

そしてその点滅とはなにかというと、おそらくヴァイタルサインがピッ、ピッ、ピッ、ピッ、という——そのようなものを小泉さんは連想しているのだと思うのですが、それこそが世界における根本的な生命性であり、ドゥルーズが *la vie* というときにはそれを見ていたのだ、というふうにおっしゃる。その退化したモノド、もはやあらゆる秩序から解き放たれてなにもできなくなってしまったが、なおも残りつづけているものの点滅こそが、この世界のリズムであり、拍動である。その拍動というのはまさにアポカリプス——すべて以後の拍動なわけですが、それをいまここで、この世界において見るのだ。それが小泉さんの議論なのです。

「ドゥルーズは、いわゆる生命主義的ホーリズムを、生涯捨てなかったと私は考えているが、その〈生〉とは、退化したモノドの懐中電灯そのもののことなのである。」(37頁)——というふうに、千葉のメタファーを引き受けてくださっています。

このあたりから、先ほどのフーコー論を念頭に置きながら、ブリッジしていきたいと思えます。ドゥルーズの霊性とは何か。それは言ってみれば世界のミニマムな生命性のことである。モノドの懐中電灯の点滅である。すなわち世界の拍動である。そして、小泉さんは最後に——少なくともこのドゥルーズ論文においては、芸術に賭けるのですね。この世界においてそのような拍動を垣間見させてくれるのは、芸術である、とおっしゃいます。

フーコー論においては、蜂起の可能性ということが出ていて、廣瀬さんの議論が「ドゥルーズ=ガタリを捨ててフーコーへ」ということだとすると、どのレベルでドゥルーズ=ガタリを捨てているのか、という点ではいろいろな見方ができるのだと思いますが、二つの論文を比較すると、一方は芸術のことを言っていて、他方ははっきりとした政治的蜂起のことを言っているわけですね。そこを、「芸術はダメだ、やっぱり蜂起だ」というふうに見るのか、「蜂起ではな

くて芸術だ」というふうに見るのか、あるいは両者はつながっていると見るのか、いろいろなバリエーションが考えられると思います。僕は、つながっていると見るほうで考えたいのです。

すなわち、芸術の問題を考えることと、フーコーがイランに見たような蜂起の問題を考えることは、なにか重なるところがあるのではないか。それはいったい何において重なるのかというと、僕の考えでは「形式」「儀礼」の概念で重なる、というふうにつなげたいのです。

集団的な魂は、芸術を通して「来たるべき民衆」になるのだ、と断言されるわけですね。来たるべき民衆というのは、来たるべきものなのですから、そこから世界がリスタートするところのものであるわけです。ということは来たるべき民衆というものは、退化したモノドに他なりません。各々の根本的な拍動だけに切り詰められているのが民衆だということです。そのような、己の根本的なミニマムな生命性に向き合うということ、それは芸術において可能になるのです。芸術において、われわれは来たるべき民衆になるというのは、芸術においてわれわれは自らをただ単に拍動しているモノドとして捉え返すよう促されることになる。そのようなことが、集団的な魂の救済なのだ—— そうであってほしい気が、僕はします。

しかし依然として、復讐精神は残るのだろうか。復讐精神が、そのような拍動への向き合いにおいて解消される、あるいは無化されることがあるのだろうか。僕はそこを聞きたいのです。千葉の解釈では、己の根本的な拍動に向き合うようになり、退化したモノドとしての自己、すなわち根底的な意味で「ただ生きている」自己に配慮すること、それが芸術です。そのときに人々は、復讐精神から解放されるのだろうか。以上のようなことが、復讐精神からの解放そのものなのか。あるいはそれは、復讐精神が依然として持続しながらも……ということなのか。

絶滅以後にも残り続ける世界の拍動に呼応するような生の形式を発明する、生活の光を、あるリズム＝儀礼へと形にする、そのような儀礼的实践が、フーコーとドゥルーズをまたぐ霊的世俗性への実践である。そして付言すれば、そこにおいてはおそらく、個人の私性と市民の普遍性の間にある、何らかの特殊的・集合的次元がつねに必要とされるし、またそれが再び争いの種ともなるだろう。

特定の形式を与えるのではなく、あらゆる統治に抗してみずからに特有の形式を創り出せ、とエンパワーするような「ジェネラティヴな形式性」を身をもって示すこと。儀礼の可塑性を賦活する生き様を見せる。それがおそらく、パレーシアの実践であり、ドゥルーズとフーコーをまたぐものなのではないかと思えます。以上です。ありがとうございました。